

+ 27 【だんちょう】

全国的な人気を誇る、といわれている巡回営業（じゅんかいえいぎょう）の〈お化け屋敷〉が、ぼくの村にも来ることになって、前評判は凄いものでした。

ぼくも待ち遠しくてたまりません。

〈お化け屋敷〉には、ぜひとも隣のお姉さんを誘って行きたい。

隣のお姉さんがこわがって、あのときのようにぼくに抱きついてくるかもしれませんから。

ごぞんじのようにぼくは女嫌いだけれども、母親と隣のお姉さんだけは別なのです。

けれども、隣のお姉さんは用事があって、しばらく町へ行くことになりました。

それでぼくはひとりで行くことにしました。

半年かけて貯金（ちょきん）した、百円玉を五枚握りしめて。

広場に巨大な簡易建築物（かんいけんちくぶつ）が完成していて、幾つもの幟（のぼり）や旗（はた）が立っていました。

そこにはいろいろなおばけの名前や姿が描かれていました。

【ろくろくび】

【ひとつめこぞう】

【のっぺらぼう】

【ゆきおんな】

【からかさおばけ】

【ねずみおとこ】

【ぶたまんじゅう】

【じんめんぎょ】

【うみぼうず】 などなど。

呼び込みのおじさんが嗶（しわが）れた声を張り上げています。

良い子悪い子出ておいで
お化けさん達待ってるよ
観ないと損だ一生の不覚

良い子悪い子出ておいで
お化けさんはもう出てる
いまか今かと待っている
良い子悪い子腰ぬかすぞ
お化け怖くて泣き出すぞ
それでも楽しい屋敷だよ
お化け屋敷は日本一だよ
ああ怖やおおおぞましや
種も仕掛けもありませぬ
お化け屋敷は日本一だよ

小学生と中学生は、それぞれ三、四人かたまって来ていました。
幟や旗を見ただけで、ベソをかいているこどももいました。
家族連れも来ていましたが、幼子が怖がって泣きじゃくるので引き返す者たちもいました。

ぼくは後で、懐爺に報告をしなければならぬから、緊張（きんちょう）して、武者震（むしゃぶる）いが何度もでていました。

みんな一番目を厭（いや）がっているの、ぼくが先陣（せんじん）をきりました。

なかは薄暗く、細い通路になっています。

おどろおどろしい音楽が天井からきこえます。

おばけは左右にいて、そこだけがほんのりと薄明るくなっています。

はじめは、

【ろくろっくび】で、首から白く細い布を下げた、顔色の悪いおばさんが、小さな階段を登ったり降りたりしているだけです。

おつぎは、

【のっぺらぼう】で、顔に白い絵の具を塗りたくっているおばさんが、顔を硬くして突っ立っているだけです。

【ひとつめこぞう】も同じで、顔に白い絵の具を塗りたくっているこどもが、そこに一つ、目を描いているだけです。

【ゆきおんな】は、人工雪の上に、着物を着たおばさんが座って、居眠りをしているだけ。

【からかさおばけ】は、唐傘のなかに、下駄をはいたおじさんが入って足踏みしているだけ。

【ねずみおとこ】は、変ににやついたおじさんが、一匹の生きた鼠をぶらさげているだけ。

【ぶたまんじゅう】は、豚のお面をかぶったおじさんが、饅頭を喰いにくそうに喰っているだけ。

【じんめんぎょ】は、魚（といっても紙粘土で作られたもの）の頭に、人の顔を描いているだけ。

【うみぼうず】は、坊主頭に膿（うみ）をもった、おできがあるこどもが、頭をかいているだけ。

まあ、他のおばけたちも、「だけ」の存在で、屋敷から出たぼくは、呆れ果てて腰をぬかしそうになり、五百円が惜しくてべそをかきそうになりました。

種も仕掛けも、あってほしかった。

それでもぼくの後から出て来た小学生や中学生たちは、恐怖の顔で腰をぬかしたり、べそをかいたりしていました。

なさないやつらじゃ。

ぼくは気が進まなかったけれども、懐爺に報告に行きました。

憮然（ぶぜん）としたぼくの顔を見て、懐爺は笑いながら、「〈お化け屋敷〉はみんなそういうものですよ。逆に本物のおばけが出て来たら、お客さんは寄り付かない。あれはあれで、あの滑稽感（こっけいかん）と奉仕精神（ほうしせいしん）を楽しめばいいのですよ。かしこい金ちゃんならわかるんじゃないですか。常に階段を登り降りしたり、雪の上に長い間座ったり、唐傘のなかに入りっぱなしになったり、ずっと鼠をぶらさげているなんて、相当に忍耐力（にんたいりょく）がないとできませんよ。

【ろくろくび】の顔色が悪いのは、息切れしているからです。

【ゆきおんな】の居眠りは、本当のところひどく冷たくて気絶しているんです。

【からかさおばけ】が足踏みしているのは、おそらく閉所恐怖症（へいしよきょうふしょう）なんですね。

【ねずみおとこ】がにやつているのは、気持悪さを必死（ひっし）で我慢（がまん）しているのですよ」

ぼくは懐爺の解釈に、目から鱗（うろこ）も涙も落ちました。

「あわれじゃのう。せつないのう」

「あわれでせつないのが、おばけですから、あのひとたちは、おばけの神髓（しんずい）を、ちゃんと理解しているんですね」

懐爺はしきりにうなづく。

ぼくも感心しつつ、

「それでも、ごひやくえんだしたんじゃから、ほんもののおばけにあいたかったのう」

と、だだをこねるふうにいいました。

「あれれ、金ちゃん。会いませんでしたか。呼び込みのおじさんがいたでしょう」

「むろんいたのう。よいこわるいこでておいで、おばけさんはもうでてる、というとった」

「それはたしかに、もうでていますよ。あの呼び込みのおじさんこそ、〈お化け屋敷〉の持ち主で、【だんちょう】という、ほんもののおばけですからねえ」

ぼくは啞然（あぜん）としました。

〈お化け屋敷〉に行く前に、懐爺の話をきいておけばよかったと後悔しました。

「それで【だんちょう】は、どんなわるさをするんか」

懐爺は苦笑いをして、

「ほかならぬ金ちゃんですから、あえていいますが、わるさをするおばけよりも、わるさをしないおばけのほうがはるかに多いんです。しかしわたしらから見れば、怖い姿形をしていますから、わたしたちが勝手に怖がっていることもたくさんあります。おばけの世界ではそういう姿形は常識なんですがね」

「ならば、【だんちょう】はこわくないすがたかたちをしていて、なおこわくないおばけなんか」

そんなおばけは知らないから一応きいてみました。

「いやいや、【だんちょう】は怖くないおばけですが、姿形は怖いんです。

呼び込みのおじさんの姿形は、かりそめでしてね。【だんちょう】とは、団長さんとまちがえられやすいですが、じつは断腸、つまり断腸の思い。ひたすら悲しみに耐えているおばけなんです。本当の姿形は、千切れた腸の集合体（しゅうごうたい）ですから、見た目にこんな怖いおばけはありません」

見なくとも想像しただけで怖い。

「それで【だんちょう】のかなしみたあ、なんじゃ」

「〈お化け屋敷〉で、本当は本物のおばけを登場させたい。でもそうしたら、お客さんは寄り付かない。【だんちょう】に協力してくれるみんなを食べさせるために、ああいう出し物をしているんです。本心よりも商売優先（しょうばいゆうせん）です。本物のおばけである【だんちょう】が、悲しくないわけはありません」

「なるほどのう。そういうもんかのう」

ぼくは何だか、いまだかいもくわかっていない、人生の一端（いったん）をのぞいた気持になりました。